

余は前節に於て此の文字の系統につき、ソグド字殊に其の摩尼教徒の用ゐたるものより發達せりとする説の正しきを述べたり、然るに此の文字は此の如く既に八世紀の前半に於て、突騎施の間に行はれたりとすれば、其の發達に關する最も自然なる解釋は、此の時以前に於て摩尼教が少くとも突騎施の據りし地方に行はれ、而してソグド文字が彼等によりて使用せられたるものなりと見るにあるべし、今此の間の消息を覓むるに、碎葉城の地方は早くより摩尼教の一派なる Mazdak 派の行はれたる地方なるが如く、<sup>(73)</sup> Barthold 氏も摩尼教の波斯にて禁絶せらるゝや、Scharastānī によれば、マズダク派は Samarkand, Al-Schäsch, Ilak 等に逃れたるものなり、Sir 河と Chu 河（即ち吹河にして碎葉城は其の河邊に位したりとせらる）との間に初めて文化を傳へたるものをして此の派のものと見るは誤無かるべしと説けり、思ふに此の宗教は他の諸教と同じく、支那に傳來するに至る迄には、必ず其の中途に當れる諸國に於ても流傳したるものなるべけれど、現存せる記録の不備を以てしては、其の跡を明らかにする能はず、然れども余は今一新材料の示す所により、此の教が天山の南、タリムの盆地に於て、支那に於けるよりも以前に既に行はれたるものなるを證明し得べきを信ず。

Pelliot 氏が敦煌の佛洞より獲たる沙州圖經によれば、其の祥瑞篇蒲昌海五色の條に

大周天授二年（六九一）臘月、得石城鎮將康拂就延弟地舍撥狀

と記し其書中に、八月以來蒲昌海（Lop Nor）の水清明徹底、五色の祥瑞を表はせる旨を述べたりしことを記せり、石城鎮といふは、賈耽の道里記に、漢の樓蘭國なりと見え、Stein 氏の獲たる地志の斷片にも、同様に記され、且つ唐の高宗の上元二年に、此の名に更ためたりと記せるものにして、Lop Nor の南に當る地なる」と Pelliot 氏